

第二期 第四十九号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020. 08. 20 定有堂書店 発行

読書の学校 奈良 敏行

読書会との遭遇 (二) 丸 祐一

二ヶ月の不通の後に Key of Life 松田 裕史
フィギュアの神の見えざる手 (下) 萩原 俊郎

仮の日々(仮) ワクサカソウヘイ
できない理由 鳥居 貴彦

8月の夢 「祭り」×「菌」 芝野 浩貴
八代日記 (五) 齊藤 仁昭

おたかい文庫のはなし ムラカミヒロミ
鳥取あれこれ その四十八 内田 克彦

交響作家の揺籃期 ・前 秦阜 梅林
マントヒヒの髪の色 古賀 啓三

夏の階段からヨーグルトまで あぎの素生
いつも、何度でも ドラメリア

…… 編集後記



読書の学校

奈良 敏行

(定有堂 店主)

二十三日木曜日、定有堂に三砂慶明さんが見えた。

書店周辺のことを、少しまとめて考えるきっかけがあり、ここ十日ほど青土社の「ユリイカ」や「現代思想」の雑誌特集を読んでいた。「図書館の未来」「出版の未来」「書店の未来」などだ。この書店特集でラインを一番引いたのが、三砂慶明さんが司会する「読書の学校」という鼎談だった。三砂さんは梅田蔦屋書店で人文書を担当されている。

「読書の学校」は三砂(みさご)さんがコーディネーターする梅田蔦屋書店の読書啓発運動だ。今年は無事状態だが、梅田はたびたび出かけ、よく駅隣接の蔦屋書店に足を運んでいた。「読書の学校」は冊子にもなっているのだが、それは手にしたことがなかった。「ちょうど持参しますよ」と三回分をいただいた。

「本の学校」とか「図書館の学校」とかは、いいネー

ミングだと親しみを感じていたが、「読書」というのは思いつかなかった。なにか啓示的な出会いだった。

定有堂では「本のビオトープ」という旗印を使うが、先日、冊子『音信不通』や「読む会」をともにする丸祐一さんに、「自分で言っていてよく理解できていないんですがビオトープってどう考えるべきですか？」と質問した。「奈良さんはビオトープ自体を生態系と考えているけれど、むしろ生態系を可能とする何かと捉えてもいいのでは？」と教えてくれた。わたしは、生き物 (biós) と場所 (topos) の重なり合いが小さな生息環境をつくる、それが黄昏ゆく街の本屋に似ていると思いついていた。でも「biós」を、物語的な生であるビオストと、生物学的な生であるゾーエー (zoe) と区別すると、考えが深化するという視点だった。

つまり「本」の存在だけだと「ゾーエー」なのだ。「本」が「人」と融合してはじめて生態系「ビオスト」となる。これは気がつかなかった。本を売るだけでなく、その根底に三十二年つづく定有堂教室「読む会」があるのは、「本」だけでは何かが足りないという無意識の思いがあったからだ。それが「本屋」「物語」の同義化だった。

そういう経緯で三砂慶明さんの「読書の学校」には驚いた。「本」より「読書」が上位概念という啓示がそこにあったからだ。

互いにマスクをしている状況だったので、顔をじっと見ていたら、「そういえばそこにある『マガジンハウス』に写真が出てますよ」と教えてくれた。二〇一九年の「本屋好き。」という特集だった。従来は新刊書店と古書店は別々に特集されるものだったが、この号は一緒の扱いになっている。そういう時代の到来を予感させる企画だった。大事な転換だと思い、定有堂は現在も八十冊ほど在庫している。六十頁に大きく三砂慶明さんの立ち姿があった。人文コンシェルジュとしての仕事として「食べることを考える」フェア棚を背景とした写真だった。美しい立ち姿だ。三砂さんの経歴からも「美しい品揃え」が方法的に探求されていると直感した。

「ユリイカ」の特集の司会付記の末尾の「私は、本に人生を何度も助けてもらいました」という一行に、わたしはラインを引いていた。質問しなかったが、とても立ち話で語り尽くせる話題でもなく遠慮した。二〇二〇年春号の『サンガジャパン』は「食べる」の特集だった。三砂さんは「『おいしい』ことは悪なのか？」と題して寄稿している。フェア写真背景の「食べることを考える」選書とこの文章は連動している。店内で棚の説明を求めたら、時間が許せば十八頁にわたるこの語りでコンシェルジュするんだと想像した。トークの入り口はきつと『おいしい』は『味』なのかだ。「人生を生き抜く力」と

「おいしい」が結びつかなければもったいないということだ。本に人生を何度も助けられたのは「本」が「おいしい」ものだったからだろう。一日三冊の読書量と聞く。知識量はきつととても豊富だ。でも「本に救われる」という経験が、「本」を美しく「盛り付ける」という方法論へと制御させるのではないかと推測した。人柄に「美への制御」を感じたからだ。

わたしの軸足が「読書のビオトープ」へこのたび少し動いた。人と人が出会えば瞬時のことでも「痕跡」が残る。ゆつくりその痕跡を反芻してみた。三砂さんは「心に響く言葉を書き抜いたノート」を大事にしているという。いつか目にしたいものだと思った。

2020. 07. 24

『サンガジャパン Vol.1 35』 特集：食べる 食と心の健康

サンガ 2020. 05

『総特集：書店の未来』ユリイカ臨時増刊号 青土社 2019. 6

『総特集出版の未来』ユリイカ臨時増刊号 青土社 2016. 3

『特集：図書館の未来』現代思想 青土社 2018. 12

定有堂教室「読む会」

毎月 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室 (会場 定有堂二階) 葉香クラブ

毎週 水曜 十九時半から・土曜 十三時半から

読書会との遭遇

(二)

丸 祐一

(法哲学者)

大学では法律を勉強するつもりだったにもかかわらず、読書会を主催する先生が社会学者だったために、法の内的視点を獲得する前に、法それ自体の正統性を外から疑うようになってしまった。しかし実のところ、初めて読んだフーコーの『監獄の誕生』は、個々のエピソードは面白かったものの、全体として何を言っているかは理解できず、「人間の死」という最後のフレーズだけを頼りに読んだ『言葉と物』はさらに輪をかけてわからなかった。当時は、内田隆三『ミシェル・フーコー 主体の系譜学』(一九九〇)が新書であったので、それも併せて読んでみたが(この新書は先月、大幅に増補改訂され講談社学術文庫に入った)、わかったような気がした程度であった。今年になって岩波新書から慎改康之による『ミシェ

ル・フーコー 自己から脱け出すための哲字』(二〇一〇)が出版され、フーコーの諸著作の全体像を容易に俯瞰することができるようになり、ああそういう問題意識だったのね、とこれまたわかったような気になっているところである。『監獄の誕生』などについては翻訳が悪いのかどうか私には判断できないが、今年になって新装版が出るということで改訳されるのかなと期待していたところ、そのままの訳で出版されたようである。フーコーを読まなければ研究者になっていなかったと思うので、今でもフーコーの写真を研究室に飾っている。その写真にはフーコーの禿げた後頭部しか写っておらず、誰の写真なんだか来客者にはわからないのだが。

読書会を主催していた櫻井芳生先生は社会学者だったけれども、社会学の古典と言える文献はウェーバーくらいしか読まなかった。とりあえずお勉強として勧められたのは、これまた最近復刊した小阪修平・ひさうちみちおの『イラスト西洋哲学史』(一九八四)であった。奈良さんからはなぜかあまり売れていないと伺った。わかりやすい本だと思うのだけれどもなぜだろう？確かにヘーゲル、マルクスあたりで終わっているので思想史に入門するには足りないのかもしれない。最近の人たちはどんな本から哲学史を学び始めるのだろうか。飲茶とかなのかしら。それはさておき、実際マルクスで終わっては困る

ので、当時は、別冊宝島の『わかりたいあなたのための現代思想・入門』（一九八四）と、橋爪大三郎『はじめての構造主義』（一九八八）を併せて読んだ。ゼミでは浅田彰の『構造と力』（一九八三）や『逃走論』（一九八六）などを読んでいたので、今から思えば、一〇年遅れのニューアカであった。先生推奨のブックリストには、廣松渉や柄谷行人や今村仁司なんかもあがっていたけれども、そのあたりは今に至るまでまったく読んでいない。この辺りは読む会の皆さんとの「内なる図書館」（バイヤール）の違いを感じる。

当時嵌まって読んだのは岸田秀の『ものぐさ精神分析』（一九七七）であった。人間は他の動物と違って本能が壊れているので、本来であれば不要な道徳とか法律といった制度が必要なのだ、という主張は、法学を学んでいた自分には衝撃的だった。岸田秀については片っ端から手に入る本を読みまくった。世の中のことを何でもかんでも同じ論理でぶった切っていくのは痛快であったが、これは後に、ポパーがフロイトのことを反証可能性がないとして批判した議論を知り、何でもかんでも説明できるのは逆におかしなことなのではないか、と思うようになった。同じ学部にかール・ポパーと批判的合理主義を研究している小河原誠先生がいたのである。小河原先生に紹介状を書いていただいて別の大学の大学院に行くことに

なるのだが、それはまた別の話である。吉本隆明の『共同幻想論』（一九六八）も同様な意味で法とは何かを考えるきっかけとなった（『共同幻想論』は七月の100分名著で取り上げられ、角川ソフィア文庫で復刊されたばかりである）。濱崎先生は『伝えたいこと』の中で「対幻想」について何回か言及されているが、上野千鶴子が『女という快樂』（一九八六）で吉本の「対幻想論」を取り上げてフェミニズムの文脈で論じていたのもこのころに読んだ。こうやって見てみると、高校までは新聞くらいしか活字を読んでおらず、大学に入ってから二年生の後期まではほぼ勉強していなかったのだから、読書会に出会ってからどうかしてしまっただけかと思えない。授業にも行かずに入り浸っていたサークルを辞めてまで勉強するようになったが、結果として就職するまで一〇年以上かかってしまったのだから、留年するよりずっとたちが悪かったのである。

一ヶ月の不通の後に Key of Life

松田 裕史

(高校教員)

今年度は、三年生の担任になった。

どの高等学校でも、四月当初には担任が生徒と面談する機会が数週間に亘って設けられている。その面談が初めての話す機会となる生徒も少なからずいる。

かれもその一人だった。

その日は朝から、早春の柔らかい空気の中に雨の予感がためらいがちに忍び込んでいた。

誰もいない二階の選択教室の机と椅子を面談仕様にセッティングする。ぼくは生徒と向かい合う形で面談することはしない。九十度の角度をつけて相手と面することをしている。

昼休憩後の午後一時過ぎ、二人目の面談者としてかれが入ってきた。手には面談用に事前に記入した用紙を携えている。座るように促し、面談が始まる。

面談用紙に視線を走らせ、話の糸口を探る。昨年度の

クラスのこと、志望大学や学部のこと、部活のことなど、当たり障りのないことをあてどなく質問し、それにかれは答えていく。お互いに多弁なタイプでないので会話はとぎれとぎれだ。時たま訪れる沈黙をぬって、雨が地面を打つ音が二階までゆらゆらと立ち昇ってきた。

一回目の面談では立ち入った話ができないことが多い。それもそのはずで、たとえ相手が教員であったとしてもほとんど見ず知らずの大人に高校生が内面を吐露する気にはなれない。そんな状況でも、何か話の取っ掛かりになるものはないかと眼光紙背に徹して面談用紙を見つめる。

趣味の欄に、「洋楽」とある。

ここを起点にもう少し面談を継続しようと瞬時に判断する。話題は何であれ、生徒と共通の興味関心があれば自然と話す機会も多くなるし、関係づくりにも一役買う。

「どんなジャンルや歌手を聞くの？」

「・・・」

沈黙が続く。

たとえ趣味のことであっても、それがその人の生活に深くかかわっているものであればあるほど、赤の他人にしゃべる気になれないのは無理もない。

「エド・シーランとかです。」

何とか振り絞って出てきた返答はこれだった。ぼくが

普段聞く歌手ではないが、ラジオで何度となく聞いたこととはある。最近ではチェーン・スモーカーなど他の有名アーティストとの共演が多く、それがアルバムになっっていることや、今は一旦、活動休止していることなども話す。多少、張りつめていたような雰囲気や和らいだが、会話は思ったほど弾まなかった。

面談は終わった。

雨は降り続いていた。

その後一月の間で、かれと会話らしい会話をしたのは一回だろうか。いや、会話ではない。採点をしていて模試の記述解答の出来が良かったことを伝えたが、生返事しか返ってこなかったのではほとんど会話や対話になっていない。

その最初の面談から二カ月ほどたった時だ。二度目の日直がかれに回ってきて、学級日誌には次のように記されていた。

「最初に聞かれたとき言い忘れたことがあります。

僕は See you again が一番好きです。あの曲はワイルドスピードのポールウォーカーの追悼曲です。とても感動的でいい曲なのですが、ポールウォーカーが事故で亡くなった影響でできたので気持ちが混ざっています。ぜひ、一度聞いてみてください。

It's been a long day without my friend. And I'll tell

you all about it when I see you again when I see you again.」

ぼくは次のように返信した。

「洋楽のポップとかロックには随分と遠ざかっているのでポールウォーカーの追悼曲は知りませんでした。洋楽に関してはほとんどブラックミュージック、ソウル、R&Bしか聞きません。なんと言っても、最近聞いているのはステイヴィー・ワンダーの『Songs In The Key Of Life』(なんと四年前の作品)です。今聞いても、全色あせていない楽曲ばかりでした。さすが、天才中の天才であり、マイケル・ジャクソンの兄貴分です。大学時代まではロックを聞いていましたが・・・調べてみると、ウィズ・カリファとチャリー・プースが関わっているとwebに書いてありました。ウィズ・カリファなら知っているの、今度、聞いてみます。」

最初の質問から二カ月。この時間をなんと名づけたらいいのだろう。不通、余白、発酵、ためらい・・・。名づけ得ぬものかもしれないそれは、もしかすると、人生や生活において欠かせないもの。『Key of Life』の一つなのかもしれない。

フィギュアの神の見えざる手（下）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

巨大な「バースデー・ケーキ」に仕立てたIさんら地元NPOの会合に呼ばれた。「このままでは壊される。でも、ただ『保存を』ではだめだろう。何かに活用しながら保存するアイデアはないだろうか」。彼らの訴えに、猫展の時の悔しい思い出がよみがえった。その時、私の頭上に「何か」が舞い降りたような気がする。

倉吉市の観光街区「赤瓦」の手本になったのは滋賀県長浜市の「黒壁」。昔ここを取材した際、商店街の空き店舗を活用した海洋堂の展示館があったことを思い出した。

（前号から続く）
倉吉市の円形校舎がギャラリーにならないか、という構想は以前から私の中にもあった。
2008年秋の岩合光昭さんの猫の写真展では、「赤瓦一号館」をメイン会場に別会場を設けて、そこを歩き来することで「町歩き観光」を促す仕掛けを思いついた。

頭に浮かんだのが円形校舎だった。屋上にある色とりどりのガラスから太陽光が降り注ぐ螺旋階段に写真を並べたら、面白いのではないか。さっそく市役所に申し入れると「もう壊す建物だから」の一点張りで、にべもない。町の記憶をとどめる大切な「昭和の遺産」に何の思い入れもない市幹部の面々が、腹立たしかった。

しばらくして、明倫小の百周年記念事業で円形校舎を

あまり自信はなかったが、「海洋堂を誘致してはどうだろう」と提案した。幸い、大切なビジネスパートナーになったタミヤ模型の子会社の社長や娘さんは、海洋堂とは古い付き合いだ。さっそく娘さんに連絡すると、「大好きな倉吉のお役に立つなら」と気っふのいい答え。

彼女は、本当に海洋堂の専務（現社長）を倉吉に連れてきてくれた。しかし当日まで専務にはためらいがあったという。父親も故郷の高知に展示館を設けていて、「これ以上、一社では荷が重い」というのが正直な気持ちだったらしい。が、ここでも「奇跡」が起きた。

前年、倉吉市は「ねんどろいど」が大ヒットし、一躍、業界の寵児となったフィギュア・メーカー「グッド・ス

マイル・カンパニー（グッスマ）の企業誘致に成功、この日がたまたま初の採用試験の説明会だったのだ。

それを知って、茶目つ気のある海洋堂の専務は試験の説明会場にこっそりもぐり込み、挨拶に立った旧知のグッスマの社長をびっくりさせたらしい。

「グッスマは海洋堂にとつて弟分みたいな会社。倉吉に進出しているとは驚いた」と専務。また、『エヴァンゲリオン』で知られる米子ガイナックスの赤井社長とも「兄弟分」と言い、「一社じゃ大変だが、この三社が手を携えれば何とかなるんじゃないか」

その言葉をIさんと聞きながら、私はずっと自分たちの身边に起きたこと…新聞記者だったIさんと知り合い、「円形校舎のケーキ化計画」に奔走したこと。偶然からタミヤ模型の子会社と仕事をする事になり、すっかり倉吉のファンになったその社長や娘さんが驚いたことに海洋堂とは古い知り合いだったこと。加えてグッスマという援軍の登場…「これらすべては、今日のためにあったのではないか！」 思わずそう叫びそうになった。

われわれはただ「フィギュアの神の見えざる手」によってあらかじめ決められた運命をなぞり、コマのように動かされたに違いない。

一方、人間にはどうやら、これもあらかじめ決められ

た「個々の役回り」というものがあるらしい。円形校舎をフィギュアミュージアムにする運動が始まると、Iさんは市役所との交渉から、数億円に及ぶ改築費用の工面、「あんな古いもの早く壊してしまえ」と言う町内会の長老たちの説得に東奔西走する毎日。それはあたかも、あのケーキ化計画で孤軍奮闘した日々の再来のようだった。

私は私で、思わぬ東京転勤を命じられ、進捗状況を遠くから見守るだけの存在。石破II魔人ブウで有名になった開館セレモニーは、東京支社のテレビで観た。

かくして「フィギュアの神」は倉吉の円形校舎に降臨し、忠実な神官としてIさんを選び給うた。

Iさんの受難の日はなおも続いている。予期せぬ「コロナ」という厄災だ。しかし、この辛い日々も、あらかじめ仕組まれた試練ではないか、という予感が（何の根拠もないが）私の中では深まっている。

仮の日々(仮)

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

「仮」がどうにも苦手である。

たとえば、仮眠。仕事に追われている最中、瞼が重くなってくる。このままでは効率よく作業を進めることはできない。ここは睡魔に身を任せて二時間ばかり寝るとしよう。よし、仮眠を決め込むぞ！と布団に潜りこむ。そして目が覚めると、二時間どころか、八時間ばっちり寝てしまっていた自分を発見する。これではおおよそ、仮眠と呼ぶことはできない。「ちよつと寝る」ということが私は不得意なのである。

それから、仮題。たとえば書籍を制作する際、タイトルは最後のほうに決まることが多い。それまで原稿は、仮題のままで進められる。この状態が、なんともむず痒い。おぼろげな景色に向かって作業を進めているような感覚が常にうっすらと纏わりつき、なんだかソワソワし

てしまうのである。ああ、早く題名の下に付いている「仮」を消去したい。タイトルが確定するまで、その不安定な心地は続く。

あと、仮締め。たとえばイケアなどで棚を購入し、それを自分の手で組み立てなくてはならない場面で、私は初手からネジを全力で締めてしまう。で、最終的には片脚が浮いているようなガタガタの棚が誕生してしまい、泣く泣くネジを全部ほどいて最初からやり直すことになる。説明書にはしつかり「仮締めしながら進めていきましょう」と明記されているのに、なぜだかそれを無視してしまう自分がいるのである。

高校生の頃に仮病で学校を休んだ日はなんだか妙に落ち着かず、ずっと緊張した一日を送っていた記憶がある。仮免許の状態で、教習所のカーブの先の標識に二度ほど車をぶつけたこともあった。私はとことん「仮」と相性が悪い人間なのである。今後、もし自分が囚人になるようなことがあれば、仮出所のタイミングには特に注意を払いたい。じつと過ごすことができず、変にアポロチョコとか万引きとかして、また獄中に舞い戻る可能性がある。

「仮」が苦手な性分を、いい加減に変えていかなければ

ばならないな、と思っっている最近だ。今年の二月頃から始まった禍災による世界と日常の変容は、私個人の生活にも大きな影響を与え続けている。まず、目に見えて当面の仕事が減ってしまった。私は文筆の仕事とは別にライブ制作の仕事をしているのだが、ご存じのとおり、現在の舞台業界は見事なまでに停滞の状況にある。私のスケジュール帳の中にあるライブ仕事予定にも、「中止」の線が何本も引かれている。嘆いていてもしょうがないが、しかし嘆きたくもなる。ああ、暇である。

したがって文筆の仕事をするしかないのだが、これがまたしんどい。なかなか原稿を書く手が進まないのである。窮屈な日々というのは、どうにもスランプを招いてしまうものらしい。筆の先に浮かんでは消える文字を追いつながら、先月の私などは完全に滅入っていた。

「焦っても、なにもいいことはない」。かつて、なにも書けなくなった時に、先輩作家にかけてもらった一言である。そう、スランプに陥ると、人は焦る。あの時の私は、完全に焦っていた。そして、ドツボにハマって、最後はなにも手に付かなくなってしまうていた。

焦燥感とは「汗」に似ていて、頭でコントロールできるものではない。とにかく、身体を休ませる以外に、焦

りを落ちつける方法はない。あの時、書けなくなった私はすべてを放り出し、ただブラブラと毎日を紡いだ。気の向くままに料理をしたり、寝たり、季節労働のバイトに出かけたりして、「仮の日々」を送った。するとどうだろう、焦りは消え、私は再び、書けるようになった。

あの「仮の日々」の感覚を、いま強く思い出している。

「仮」でいい、いまはなにをするにも「仮」でいいのだ。なにせ、誰もが世界の組み立て方を見失っている現在に私たちはいるのである。こういう時に焦ってなにかに決着をつけようとしても、きつと上手くいかない。大切なのは、全力でネジを締めるのではなく、すべてを「仮」で止めておくという感覚なのだろう。そうやって、完全を目指さない態度で世界と向き合っていけば、なにかと目がかそのうちに噛み合って、最後は脚の安定した棚が目の前にきつと現れる。私はいま、「仮の日々」という文章を、「仮」で書いている。こうやって、「仮」を少しだけ、得意なものにしていくこうと思っっている。

どうせこの世は、仮初めなのだから。そんなことを唱えながら、少しずつ進んでいく夏になりそうだ。

できない理由

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

雨。堀川七条のオフィスビルに行く。ひさしぶりにちやんとしたかつこうをしたほうがいいのかもしれないが、今日も雨。サンダルとか履いたらラクなのに。スニーカーはびちよびちよでつるつるした廊下はキュッキュと音がする。エントランスでもう帰りたい。部屋に着いたらもう全員揃っていた。名刺交換。あと5枚しかはいつてない。べらつべらの名刺入れ。とても簡単な打ち合わせがあつというまに終わり、8月から番線がもらえることになった。

結局のところ番線とはなんなのか。大手の取次から本を仕入れるときに使うアレ。最近本屋を開く人はたいてい高額の保証金があるから…とってあきらめることになつて、らしい。詳しいことはいろんな本に書かれて

いるので読むといいと思います。『本屋、はじめました』辻山良雄(ちくま文庫)などわかりやすかった。

こまつたときは奈良さんにメールする。今日もすぐに返事が来た。「(取次との契約には)「公開知」と努力で築く「暗黙知」があります。取引の中で「暗黙知」を増やすことが大事です。「公開知」の中で当たり前に仕事すると、利益がでません」と返信があつた。なるほど。本屋とそのまわりで10年近くぶらぶらしながら新しく契約をむすぶことについてはほとんどなにもわからないのは、この業界は暗黙知の占める部分がとても多いからかもしれない。もしくは自分がずっと仕事しているフリをしてサボっていただけか、どちらかだろう。いや両方か。

日販京都支店のOさんは明快な人だった。はじめてこの店に来られたのは去年の10月。前週に共通の知り合いであるTさんから紹介されたと言う。フットワークの軽さに驚く。その場で日販と書店の取引について簡単に教えてくれる。まず個人との取引はしない、法人でないのだめ。月の取引は最低でも50万円程度は必要。さらに最初の保証金として売上の2ヶ月分を用意しないといけないだろう、とのこと。そして一番の壁は本を運ぶ配送のトラック。新しく毎朝のルートを作るのがいまの物流をめぐる状況では実質不可能、とのこと。毎日雑誌が入荷

するはずのコンビニの隣であっても、運転手の荷下ろしの手間が増えるという理由で配送してもらえないことがあるような。

できない理由はたくさんある。なのでできません、と納得させることはとても簡単。世の中のほとんどの大人はそうして生きている。誰を納得させようとしているのかは知らない。だが〇さんは少し違うふうにみえた。ポソポソとしたこちらの話に耳を傾けてくれる。うちの店にトラックがくるのがむずかしいなら、日販の京都支店にウチの分を配達してもらって、それを僕がチャリンコで取りに行くのはどうですか？ といってみた。「支店には毎日荷物がくるし、いっしょに下ろすのはできるかもしれないですね」とのこと。それだけでぐっと話がすすんだ。

残る条件もなんとかなる道をいっしょに探る。ダメな理由をはっきり言ってもらえば、その隙間をぬってなんとかなる道は見つかるものだ。ずっとそうやって生きてきた。今回もいろんな人を巻き込んで、断られたり馬鹿にされたりしながらちよつとずつなんとかしていった。

最終的に、知り合いの本屋さんに間に入ってもらった形で番線はできた。番線ができたことがゴールではない。いまその地点にいるというだけ。これからどこに行くのかはわからない。「品揃えを取次に頼って個性を失い経

営が立ち行かなくなった本屋さん」の話をたくさん聞く。配本や利幅やなんやかんや。どんなときも、できない理由はたくさんある。わかりやく説明できるのはいつもできない理由の方だ。だって、どうやって成り立っているんですか？ と聞かれても「さあ？」としか言いようがない。

今年の1月2月くらい、開店して1年を迎えるちよつと前あたりからバイトをしなくても家賃が払えるようになっていた。どうしてそうなったのか、わからない。ただ気づいたらそうだった。はつきりと言えるのは、本を買ってくれてありがとうということだけだ。それ以上のことがなにかあるだろうか。

8月の夢 「祭り」×「菌」

芝野 浩貴 (地球探検家)

大宮と浦和の中間くらいに、武蔵・相模・甲斐・下野・上野・信濃の六ヶ国の峰も望め、晴れば富士山も望めた絶景ポイントがあった。

中山道は2年前、18日かけて歩ききった。最後の日は、大宮から日本橋に向かったのだが、浦和、蕨宿を過ぎ、荒川を越えて板橋宿に着いた時に、初めて桜井徳太郎文庫(民間信仰 ちくま学芸文庫など)があることを知った。私が民俗学に触れ、ハレ・ケ・ケガレの流れを知ったのは大学時に受講した桜井講座だった。柳田国男や南方熊楠をよく引用するのも二つの賞を受賞している桜井徳太郎の影響もあるのかもしれない。板橋区からは桜井賞も開設されているが、桜井の生まれは長岡で、長岡市の名誉市民でもある。長岡は、山本五十六(太平洋戦争)、河井継之助(戊辰戦争)、小林虎三郎(米百俵)、井上田了(妖怪学の祖)などに代表されるように、目に見えないものを大事にする精神を受け継ぐ町である。1度目は山下清が「長岡の花火」を作るまでに何を感じたのか探ろうと足を運んだ。「みんなが爆弾なんか作らずに、きれいな花火ばかり作ったら戦争なんて起きなかつたんだ」と山下清は呟いたが、一箇所から直線的に打ち上げるのでなく、信濃川の河岸

を利用して絵巻のように横に広がりながら、1万発打ち上げられる。

立体的色彩は圧巻だった。日本三大花火の中でもテーマを「慰霊と復興」とする長岡花火は、2011年も自粛せずに開催された。長岡空襲での慰霊が始まりだといえ、東日本震災、中越地震、熊本震災などに対して、もちろん戊辰戦争も含めて幅広い鎮魂の雰囲気が年々広がり重なる。「フェニックス」では2回とも泣いた。この文が読まれる頃にはコロナ禍での厄払いとしての意味も加わり、打ち上げられたことだろう。

2度目は東北4大祭への足掛かりとして長岡花火を観た。東北4大祭とは、青森ねぶた、秋田竿燈、仙台七夕、山形花笠のことで、全部回るには算数的には「4!」通りの行き方がある。熊楠の粘菌話に掛ければ、最短経路問題になる。粘菌の性質を利用して、高いところに光を当てて、水の流れる低いところを設置して実験すれば、粘菌はJ Rの鉄道路線の形を動く。増井真那君は学びたい若者の一人だが、彼のいう変形菌のように動かないと同時に4つの箇所に行くことはできない。時期がずれていればゆっくり回ることも可能だが、同じ年に訪れた。もちろん新幹線やタクシーは使わないので、どうやって量子的に菌として回ったのか4県の祭の時期と場所を確認してもらいたい。

①竿燈祭り「長岡↓秋田 千秋公園(旧久保田城)」

城下町境界の40の町が参加。技は、平手、流し、額、腰、肩の5種類があり、4日間担ぎ競う。かつては笹竹を川から遠くへ流し去って七夕を迎えていたのが、笹竹・提灯の大型化で、1個でなく46個の提灯がワンユニットで12目の竿燈が270本と変わり、約1000個の提灯で慰霊することになる。竿燈は稲穂を形どる。ドッコイシヨ、ドッコイシヨ、オエタサ、オエタサ！

②ねぶた「秋田↓青森」ラッセラッセラッセラー

三大ねぶたで比較すると、立ちネプタの五所川原が高さ、扇の弘前ねぶたは平面的で太鼓が大きいのに対して、青森のねぶたの山車は立体的。仙台をはじめとする七夕は神迎えなのに対し、竿燈やねぶた、ねぶたは神送りで差異化されている。ねぶたを台船に乗せ青森港内を進むのはねぶた流しの名残、菅江真澄日記にも「暮れると子供や大人たちもまじりあい、ねぶたもながれよとはやしながら歩いてゆくのが、そうぞうしいほどである」とある。

③仙台七夕祭り「青森↓仙台」

毎年旧暦の七夕である8月6日から8日まで開催される。全国から200万人が訪れる随一の祭りである。七夕かざりの特徴として、どの竹飾りにも、7つ飾り「(短冊)学問や書の上達を願う(紙衣)災いの身代わり(折鶴)長寿(巾着)富貴、貯蓄、商売繁盛(投網)豊漁(屑籠)清潔と儉約(吹き流し)織姫の織糸」がつけられているこ

とや、和紙なども使っていることで、仙台駅の西口から5大商店街を中心に切れ間なく、2キロぐらい続く。

④花笠祭り「仙台↓山形」

ヤツシヨ、マカシヨももとは、山形の初代藩主の最上義光を祭る義光祭があつたが、それを打ち消してまで生き延びてきた花笠音頭。赤い笠からは紅花の作業唄かと想像する。男女関係なく胸より上ははだかで、小中学生や山形大学生、看護学校生もエントリーして踊る。パレードは、文翔館をゴールとする県道山形山寺線(かつての山形城の外堀)で一直線に行われる。

今年はコロナ禍「第二波」で祭りに参加することはないだろう。4大祭りを観て私を感じたのは、山車・竿燈・七夕飾りを作るまでの長い時間の重み、跳人や花笠踊りを各ユニットで踊る時の一体感、会社・学校・町単位で歴史を感じ、自然へ感謝しながら連なる生命の躍動である。それぞれのきめ細やかな共同作品での19時過ぎから21時までの催しが「ハレ」だとすると、素早く的確な後片付けと引き際が「ケ」であつた。花火同様一瞬の儂さが雅を誘う。

日本中至る所で、各個人が自分の中の「祭り」を持ち続けることを祈ろう。

八代日記

(五)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

七月某日

出産後に妻と子たちには実家で暮らしてもらっていたがひと月経ったので八代に戻ったその晩に階下の住人から子の足音がうるさいと怒鳴られた。その場は謝ったが子どもは走り続けるもので今度は壁だか天井だかをドンドンと小突かれた。子どもが怖がったらどうすんだこの野郎と思いつつも申し訳もないので子どもが寝付くまでドライブに出たが毎日それを続けるわけにもいかないかと憂鬱になる。

その翌日も壁を叩かれた。そんなにうるさいもんなのかとまた怒りそうになるが眠りたいところをバタバタされたら迷惑な気持ちもわかる。わかる。どっちも悪くない。いや、子どもを寝かしつけられないのが悪いのか？そういう申し訳なさの中で子育てをするのはうんざりだ…。

少子化の原因が身にしみてわかる。

この部屋を借りるとき、子どもが2人になるが下には響かないかと不動産屋に聞いて、「大丈夫」との返事だったのでこのアパートにしたが、そんなアパートあるわけないか。子どものランニングやジャンプを制限したくないので引越しを決意する。

八代に来る前に社宅もあるよと言われていたのを思い出し会社の人に相談し、入居させてもらうことになった。引越し屋を頼む余裕はないので、当面夜だけは社宅に移動し、少しずつ荷物を移動させることにする。不動産屋に文句を言ったが、金は返せないとのこと。

七月某日

ものすごい量の雨が降った。通勤途中に球磨川を渡るのだが、濁流というよりも荒波で、川とは思えない様子だった。この日は店は開けないことになった。人吉・球磨地方、芦北方面など甚大な被害がおよんだ。こんな雨が毎年続くのだろうか。おそらく続くのだろう。

七月某日

社宅と言ってもアパートのようなところではなく、店舗の二階部分一戸だけである。かなり古くなっており、まずは拭き掃除を念入りにするしかない。網戸は全部破

れており、トイレの取っ手も折れている。襖も障子もボロボロで、直しながら住むしかないが、子どもが走り回れるというだけで十分で、手入れのし甲斐もあるというもんだ。

引っ越し作業で本を段ボールに詰めているときになぜだか懐かしい気持ちに襲われる。なんでだろう…？ そうだこれは本屋の返品作業をしていたころの記憶よ。あああなた生きていたのね。再会を懐かしむようなそんな気持ちになる。本のダンボール詰め作業を体が覚えていて。本屋の仕事はフィジカルなんだ。頭と体を駆使するのよ。ああ、本屋の仕事がしたいなあ。

うなりだすターンテーブルの上

From 千光年先速達で受ける Funkiness

頭の奥でサイレンが予感を一つ吐き出しそうだけ

あの子スイングン屋根の上

自然急展開を告げる光景にパンを振れ

頭の中の雷電が答えを一つ押し出しそうだけ

白いラインの向こうまで

夜はギターをかき鳴らしはじめ

アスレチックな町を抜け
オカルティックな声をあげ
白いサインが灯るまで

夜はギターをかき鳴らしはじめ
タフなチートの脇を抜け
スタンダードで踊りだそうぜ

あふれだすアスホールに倍達するな喝を入れ
予言失言暴言問題発言放り投げ
頭の中の弁慶が七つ道具を貸し出すようだけ
スリーナインを超えるまで

夜はギターをかき鳴らし進め
腹が減ったら飯を食え
喉乾いたら水を飲め
白いサインが灯るまで
夜はギターをかき鳴らし進め
タフなチートの脇を抜け
スタンダードで踊りだそうぜ

(ケバブジョンソン 「ラグリマクリステイ」 作詞：杉浦真寛)

おたかい文庫のはなし

ムラカミ ヒロミ

(フライング・ブックマン)

近頃、文庫が高い！以前は、見た時買いで、片っ端から浚うこともできたが、今や、一冊買うにも、左見右見、思案投首、熟慮英断を要する有様である。

講談社学術やちくま学芸は、レーベルの性格上ある程度止むを得ないとしても(ただ学術は近頃、玉石混淆が目に見え。自社の現代新書や二流歴史出版社の再録が多すぎはしないか)、翻訳物はどの社も、一寸気になる新訳は軒並み千円を超える。なまじ、千円の小遣いで、文庫を四冊、五冊と買い漁っていた時代を知っているだけに、千円文庫はレジに持って行くだけで足が震える(年のせい)。国内のエンターテインメント系でさえ、五百円以下は最早絶滅危惧種。中高生(一部大人含む)に人気のラノベ文庫も五百〜千円の間。彼らは、少ない小遣いで、どう遣り繰りしているのだろうか。

そもそも文庫と言うのは、安いが身上であって、高い

文庫というのは、自己撞着でしかない。

古今の名著を、金のない読者のために、廉価で発行することが目的であった筈で、そのため、判型を掌サイズ、軽装本とし、フォーマットを統一、活字を小さくして詰め込めるだけ詰め込んでページ数を抑え、小口の断裁も節約し、価格をぎりぎりまで切り詰めた。

いみじくも岩波茂雄大人が「携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし」と仰せらるるとおりである。

戦前のことは知らず、昭和四十年代後半、筆者が文庫に手を出し始めた中学生の頃は、一冊が概ね二百円台であった。百円台のものも、結構残っており、岩波文庫の星一つは七十円だった(『サロメ』や『海神丸』などがこのランクだった)。

事情が変わってきたのは、四十八年の石油ショック以降である。諸式が高騰し、紙も値上がりした。当然、累は本にも及ぶ。

単行本は七、八百円台に、文庫も二百円から三百円台が主流になって行った。新書判のコミックスが、二四〇円から二七〇円になったのも、確かこの頃だった。

そんな中で、五十一年に講談社学術文庫が創刊される。最初の二年くらいは、他の文庫と似通った価格帯だったが（その代わり矢鱈と分冊が多かった。朝三暮四みたいなものである）、五十四年に事典類が大量に投入され、大きく変わって行く。文庫に辞書、というのほちよつとしたコロンプスの卵だったが、当然、従来の価格帯では対応できない。

『国語辞典』が九百円、『英和辞典』『中国古典名言辞典』などは千円を超えた。これらは、千ページを超えるものばかりであったが、翌年以降、通常ページのものが軒並み五百円以上となる。

五十五年の『経済辞典』では、遂に二千円を超えている。

講談社文庫でも、六十年に松本常男の『ビートルズ海賊盤事典』が出て、八百五十九ページ、二千四百円という価格で読者を驚倒させた。

講談社文芸文庫はマイナー文学（と言っては語弊があるが、かつての純文学は今やこのカテゴリーである）の宝庫として、すっかり定着したが、お高い文庫としても有名である。何せ、薄い作品でもみな千円台、翻訳物など二千円を超える。装丁も美しいし、魅力的なタイトル

も少なからずあるが、うっかり手を出すこともできない。楠木清方の『紫陽花舎随筆』が出て、おつ、と手に取った所が千九百八十円（！）、矯めつ眇めつした挙句、諦めた。元版を古書で買った方が送料含めても遥かに安くつく。先日出たばかりの『稲垣足穂詩文集』も二千四百二十円（！）。年金生活者（予備軍）にはとても手が出せませぬ。

確かに、文庫にしては手が掛かっているし、部数も少ないだろうことも想像される。印刷製本経費も高騰しているだろう。しかし、この値段は、一体誰に買わせようと設定されているのか。高齢の固定客層と図書館あたりであろうか。豪華な見映えの装幀は、高価格を納得させるためのエクスキューズのようにも見えてくる。

現在の同文庫はそういった状況だが、かつて、もう少し単価が安かった頃、なぜか一点だけ特装版を出している。井伏鱒二の『厄除け詩集』で、平成六年刊。クロス装、夫婦箱、スリーブケース入りという念の入ったものであった。（セミ・ハードカバーなので、前号の文章で取り上げるべきだったかも）価格は四千八百円。前年に著者が亡くなっているのに、或いは一周忌の記念でもあったのだろうか。

鳥取あれこれ その四十八

内田 克彦 (地域研究家)

近所の新滝山の天神川沿いの桜並木に、「八百比丘尼」やおびくに又は、はつびやくびくに之塚」と書いた石碑がある。この伝説が米子の粟島神社にあることは知っていたが、鳥取のこの場所にあるのが、かねてから不思議であった。滝山に住む郷土史家大田勝也氏から、「馬淵さんが地元の人に知ってもらおうと建てられた」とその由来を伺うとともに、「八百比丘尼」に関する資料をご教示頂いた。

酒井董美(ただよし)著『山陰のわらべ歌・民話文化論』によれば、伝承地は全国一七都府県に及び、県内では粟島以外に鹿野町と倉吉市別所出村の穴田、鳥取市では竹ヶ淵と面影山の計五か所の記載がある。参考資料とされる、一九八四年発行の同じく酒井董美、坂田友宏等著『日本伝説大系第十一巻 山陰編』(みずうみ書房)にあたり、鳥取市の二か所について、文献として『因幡誌』と『因幡怪談集』とが掲げられていた。

まず、「竹ヶ淵」については、『因幡誌』から「或説

に当城主川狩の時竹ヶ淵に人魚を得て之を食しけるが没落の時男子は討死して女子一人残りて長寿を保ち諸国を経歴す世に八百比丘尼といふはこれなりといふ」と引用されていた。『因幡誌』に当たると、「卯垣村」の「古城趾」の項に、「爵山城と號す小西采女正と稱する人代々居城の跡といへり昔國府川本名稻葉川宮ノ下村の入口より岩倉の山下を流れて爵山に行當る其處を竹ヶ淵といふ」から始まる一文が引用文よりも前にあった。地名は残存していないようだが、近所にあったとされる「竹ヶ淵」で人魚を獲ったとの話が出てくるのは実に愉快なことである。

『因幡怪談集』からは長文を全文引用され、その内容は、清源寺様(二代池田綱清)の御代、江戸御奉公御免の御台所御煮方某が古郷仙台の、古主である六百石の領主に尋ね行ったところその内室が因幡を懐敷思い「因幡しやく山城主の娘」と告げ「夫に添ふも幾人か不覚我か年何百か不覚扱と不思議の事共也」とあるなど、非常に興味深い話である。但し、この女性を「八百比丘尼」とは書かれていない。

因みに、宝暦年間(一七五一〜一七六三)に編纂されたとされる『因幡怪談集』を翻刻したものは、坂田友宏・

永井猛氏による『米子工業高等専門学校研究報告第二十号』（一九八四年刊）及び『江戸怪異綺想文芸大系第五卷 近世民間異聞怪談集成』（二〇〇三年刊）がある。この話には「法美郡しやく山城主の事」の表題があり、「しやく山城」やその城主の娘で何百年も生きた女性が登場するにもかかわらず、後の一七九五年成立とされる『因幡誌』が参照したようには見えないのは何故だろうか。

次に、「面影山」については、『因幡誌』から「八百比丘尼屋敷 面影山の絶頂少しの平地あり昔此所に八百比丘尼住ける跡といひ伝たり」から始まり、「世に謂ふ八百比丘尼これなりと」で終わる一文が引用されていた。

さて、これらを原典とする過去の刊行物を探してみたところ、「竹ヶ淵」については、①『岩美郡誌』（一九一二年刊）中「爵山城ト小西采女正」の項（『因幡誌』類似）、②荻原直正著『因伯傳説集』（一九五一年刊）中「尺山城主の女」の項（『因幡誌』及び『因幡怪談集』）及び『因幡怪談集』の記述を踏まえた上でかなり加工と「八百比丘尼」の項（『因幡誌』類似）、④野津龍著『鳥取県伝説集(上)因幡編』（一九八九年刊）中「尺山

城主の娘」の項（『因幡誌』類似）と「尺山の八百比丘尼」の項（『因幡怪談集』類似）、⑤鷺見貞雄著『因伯の怪談・奇談』（二〇〇三年刊）中「卯垣城の八百比丘尼」の項（『因幡怪談集』より）と出典明記するもかなり加工の五著作があった。

また「面影山」については、①荻原著『因伯傳説集』中「八百比丘尼」の項（『因幡誌』出典明記）、②渡辺著『鳥取市内伝説集東部編』中「比丘尼屋敷」の項（『因幡誌』類似）、③野津著『鳥取県伝説集(上)因幡編』中「八百比丘尼の住居跡」の項（『因幡誌』類似）の三著作があった。

なお、面影郷土史研究会発行の『面影郷土史』にあたるのと、一九八二年刊の第2号及び第23号に、伝説の四例が刊行物名を掲げて書かれていた。一例目から三例目までの出典は、それぞれ『因幡誌』、『岩美郡史』、『鳥取市内伝説集東部編』であった。四例目の『ふるさとの面影』は、探し出すことができなかつたが、おそらく地元の方から聞き取った話であり、この話が地元で代々語り継がれていたのだろうか。面影郷土史研究会が二〇一〇年に発刊した『面影傳説―伝えたい郷土―』には、「面影山の八百比丘尼」という表題で、『因幡誌』の「八百比丘尼屋敷」とほぼ同じ話を載せている。

交響作家の揺籃期・前

秦阜梅林 (やすおか ばいりん)

(楽人)

I 『交響作家』に就いて

18世紀。「交響曲」は未だ歌劇の序曲、本編の幕開けを待つ観客へ暇潰しの余興に過ぎなかつたけれど徐々に好楽家を唸らすもの、つまり歌劇のハイライトをソナタ形式に展開させた管弦楽作品へと変貌して行つた、ハイダウン・モーツアルト時代。単独で演奏会のプロに載り、堂々主張する絶対音楽の華、そして：音楽史上最大の革命がやってくる、ベートーヴェン第三『英雄』交響曲の登場である！

一夜にしてロマン派時代の到来を告げた！作品のテーマが或るひは個人的なものであったり、形式や管弦楽の編成は肥大化、其の規模も膨れ上がった。はっきり言つて英雄交響曲は、ずっと後に登場するマーラーの交響曲

を既に予見させておりシベリウスやショスタコーヴィッチと言つた20世期の交響作品の規模を凌駕して居る。

爾来いつか『交響曲』を書き、世に問ひ認めらる々事こそ全ての作曲家(シリアスな器楽作品作家)には生涯の一大事業となつた。主要作品をほぼピアノ曲にかためたシヨパン、歌曲に限定したヴォルフ其れにヴェルディ、ヴァグナー等歌劇作家や教会音楽家を除く世界中の。

勿論、其れは職業的或るひは社会的な地位ではなく、専ら名譽職、称号。

極めて若い時期に、既にポピュラーな大曲第一号協奏曲を世に問ふたブラームスや、ブルックナーは齡40を過ぎ、フランクに至つては60を過ぎて漸く殿堂入りを果たしたが其の中から続々ベートーヴェンに続く不滅の名曲が生まれた。

II 10代の交響作家

そんな老巨匠達を尻目に、10代で易々其の列に加はつた神童達：モーツアルト、メンデルスゾーン、B.ビゼー、etc.と言つた面々。中にミドルティーンから初めてなんと5曲事業を推し進めた怪童が目を引く！我らがシューベルトで在る。

今日彼の『交響曲全集』(CDや楽譜)の前半を占め

る此の時代の所産。後期・晩年（と言っても夭逝、せいぜい30歳だけ）の其れに較ぶると軽いものだがベーム、シユタイン、ケルテスといった名指揮者名門オーケストラが挙って演奏する其れら、文学で喩へると？ランボアの詩集、美術ならミケランジェロ『ピエタ』であらうか？

III 交響作家の修行時代

いったひ交響作家には其処へ辿り着く迄の道筋を簡単に見つけられるものだらうか？否、残念乍らどんな高性能のグーグルを数万回検索したところで一向深い、霧の森の中を彷徨ひまはるだけ。

スコアを書くだけなら早熟な天才には或るひは可能かもしれない!! しかし、其れが生楽団に奏でられ公開で響き渡らなければ？と云ふ高いハードルが。然も良き交響曲を書く為には、さういふ貴重な体験を日常的に幾度となく重ねなひと決して書けなひ耳や目の鍛錬が要求される…。

12歳の誕生日プレゼントに、室内管弦楽団を贈られて了ふ！メンデルスゾーン家の如き超弩級ブルジョワでも無ひ限り、交響作家に至る修練の道を早い内見つける事は容易くはなひ。しかもPCやAD機器は疎か、公共の

図書館等の整備も未だ追いつかなかく他作家のスコア等も中々手に入らなひ18世紀生まれのシューベルトが如何にして交響作家として『響きの感覚』の実践を早い内から身につけられたのか、一寸した謎ではなからうか？
実際、前述した後期の今日「古典的交響曲」と称へられるハ長調、ロ短調の二曲さへ本人は実際に生演奏では、聴いて居ないか？良くてアマチュアの理想的と云ふには甚だ心許ないなひ不完全な状態でしか聴けてなひ現実の中、其れを解く鍵は彼を育んだ『環境』にこそ在る。

以下次号…

「今回のディスク」 Fr. P. シューベルト

交響曲（第三？）ニ長調 D200（1815）

カルロス・クライバー指揮ヴィナー・フィルハーモニー（1978年9月）

ミサ曲（第2？）ハ長調 D167（1815）

ハケーゲル指揮ライプツィヒ放送合唱団、交響楽団Mハヨショヴァ Sop. 他

マンハッタン色の髪

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

僕は自分の小説にあまり今様のモノを使いたくない。例えば携帯とか。

早晩、陳腐化してしまうことが自明だからである。

アメリカの新聞の日曜版は大部で、日本の新聞だと正月版を思えば良い。そして社会、ビジネス、カルチャー、スポーツ、等セクション毎に分かれていてコミック(漫画)ページも独立している。

殆どが四コマ、一コマ漫画なのだが、先々週くらいから、登場人物達がマスクを付け出した。

コミックは、如実に世相を反映する。

作者達の、これはもう一過性ではなく、New normal (新常态)なのだ、という肌感覚なのであろう。

こんな生活は嫌だけど、と書いたが、一年半ほど前に仕事を辞めてから、殆ど生活の内容は変わっていない(笑)。書くことと、おさんどんを中心に据えた暮らしである。それと適度の運動。

コロナ後、欠落したのは「旅」。

旅は普段のモノトーンな生活のアクセントなので、これが無いのは辛い。

二種類あって、高齢の父と過ごすための日本帰国、それと、これは二年ほど前に、突然、家内の憑かれたような情熱で始まった、マダガスカル、ボルネオ、といった、ややエキセントリックな旅。この九月にもタンザニアに行く筈

House arrest、という言葉がある。これは、罪状にもよるのだろうが、何らかの条件があり、監獄での収監の代替として許される、自宅拘束のことである。

これにも幅があるようだが、自宅から何ヤード以内の外出、とか、職場への通勤等、許可される場合もあるらしい。

大時代な云い方をすると、塾居、又は幽閉か。

拘禁遵守の担保として監視装置の付いた足枷をするらしい。Ankle monitor と云う。

もうお気付きだと思うが、一億、いやほぼ全人類、総House arrest の時代ですね、と云いたいのである。

こんな生活は嫌だけど、言葉の真の意味で「未曾有の」などという体験は中々できるものではない。人類総塾居の時代。

今はその真っ只中なので、全体が見えてないけど、人という人、全ての集合的 Psyche が変容し始めているのだろうなあ。

であったが、数日前キャンセルした。

トランプ政権は、この国難に対し、無抵抗降伏を決めたようである。その無為に対し、国中が激しい糾弾で満ち溢れていないのも、受容のフェーズに付む、静かな群衆に囲まれているようで、不気味。

更に末期的なのは、大統領選が接戦の様相であるらしいことだ。

この国が初の黒人大統領を選出した際は、感動で涙したが、その同じ国が

このオレンジ色の髪の毛のマントヒヒ（マントヒヒ、ごめん）を再選するようなことがあれば、僕は真剣に移住を考える。

この国の価値観や文化は、醜悪な変貌を遂げつつあるが、この無脳症赤ネクタイに、そのような影響と達成を許していることは、人類総蟄居と同程度にシニールである。

今書いている小説で、子宝に恵まれない、二世議員の妻の、女子大に入りたての義妹が妊娠し、義母に堕胎の費用を所望すると、性別が判明するまで墮ろしてはならぬ、と命じられる。

「男ん子やったら勿体なか」（地盤は九州、福岡）

「いつまでも子を授からない嫁を見限り、道代は薫のお腹の子を、創の嫡子として育てる決定をした。出産するまで、薫も弥世も世間の目に触れてはならず、蟄居しなくてはならぬことも」

そして無為がこれ程耐え難いものだったのか、と、二人とも閉口する。

やっているうちに、コツのようなものが掴めてくるのは何でも一緒だろうが、小説を書くのにこれが決め手、みたいな絶対コツは無い、ということも同様に分かってきた。ま、思い付きみたいなもので、信用はできない。今の作品を書きながら感じているのは、面白い、活きいきとした登場人物が半打くらい揃えば、ほぼ小説は出来上がったようなんもんだな、ということ。

面白いキャラクターが揃わないと、興味深い会話やハプニングもない、というのは、実人生と何ら変わらるところがない。

緩いプロットは、無いことは無いのだが、登場人物の一人ひとりを深く知ると、彼や彼女の発想や発言で物語が独り歩きをし始め、これこそが小説を書く醍醐味、などと思っているのは今だけで、取り返しのつかないことになり、来月号では、プロットは予めガッチリ固めなければなりません、などと書いているかも（笑）。

しかし今のところは、思い入れの出来るキャラクターと深いところで付き合ひ、それに作者の体験、例えば House arrest のような、が滲み出してきて混じり合ひ、お話しが出来上がるのだな、などと感じている。

夏の階段からヨーグルトまで

あきの素生

(くうねるめがね)



アパートの階段に、蟬がいた。手すりや壁にとまっていたのではなく、階段の隅っこにじっと佇んでいた。

蟬は嫌いじゃない。夏の気温が、まだここまで高くなかった(「真夏日」が続くようにはなっていたが、まだ「猛暑日」なんて言葉はなかった)頃、うだるような暑さの中を歩くのに、少しだけはまっていた。散歩はもともと好きで、どの季節でもよく歩いていたのだが、焼けたアスファルトと逃げ水、青い空ともくもくの雲、緑と木陰、制服の白いポロシャツは、不思議と心地よい記憶として残っている。ただでさえ、逃げ場なくまとわりついてくるような空気に、蟬の声が間断なく響いて、暑さしか感じられなくなるというのに。

当時、カミュの『異邦人』を偶然手にした。読み進めるうち、夏の、あの暑さと気怠さを思い出した。体感した、ように感じたというべきか。本(正確には、小説と文学とか)ってすごい、と驚いた。紙に書かれた文字

が、文章が、ある体の感覚を引き起こすことができるのが、とてもおもしろいと思った。また体験してみたくて本を読んだし、実際の感覚を確認するように、夏に歩いた。蟬の声は、そこに不可欠なものだ。だから、蟬は嫌いじゃない。

とはいえ、大きな羽音をさせて飛びかかってくる虫は、恐怖でしかない。最初に気づいたときはぎよつとしたが、向こうは「泰然自若」といった風情で、こちらが知らずに近づいても慌てて飛び去ったりしないでいてくれたので、「ぎやー」などと叫びながら階段から落ちる悲劇を免れた。

アパートの階段は、踏み板が蹴込み板(垂直面)から四、五センチはみ出している。蟬は、その下にいた。ちょうど雨が降っていて、ああ、小さな軒下で雨宿りしているのだな、と感心しつつ、刺激しないようにそっと階段を上がった。

2、3か月前だったろうか、同じく階段の踏み板の下に、蜂が巣を作りかけていたこともあった。階段を上るときは、足元しか見ていないことの方が多い。蟬は踏み面にいたのですぐ気づいたが、蜂の巣は上段の踏み板にぶら下がるように作られていたので、小さいうちに見つけられたのは幸いだった。自分の部屋のベランダにも、

何度か巣を作られかけたことがある。きつと近くに蜜たつぶりの花々が咲くからだろう、蜂に好かれるア・パートだ。

蜂蜜は、歳を重ねるごとに、だんだん好きになつてきた。子どもの頃は苦手で、ホットケーキにかけるのは、もっぱらメープルシロップだった。今は、ホットケーキを焼くことも少ないので、他のことに使わないメープルシロップではなく、汎用性のある蜂蜜を常備している。

先日、ナッツの蜂蜜漬けを手に入れた。眺めるだけで気分が上がる。おいしくいたくために、久々に無糖のヨーグルトを買ってきた。ナッツの蜂蜜漬けを入れたヨーグルトは、とてもおいしい。その時々によつて、蜂蜜を足したり、バナナを入れたりして楽しんでる。

臨時休校など、新型コロナウイルスの影響が色濃く出始めた頃、乳製品の消費を、という気運が高まった。私も一リットルの牛乳パックを買つてみた。しかし、シチュエーションやグラタンの季節でもないし、コーンフレークやグラノーラを食べる習慣もないしで、消費が進まない。一部では、「蘇」が古代以来のブームとなつていて興味をそそられたが、一時間、レシピによつては二時間近くも牛乳を混ぜながら煮詰めていく根気がなかった。

こんなときこそ、「カスピ海ヨーグルト」ではないか、とふと思いついた。ブームがいったのか、もはや思い出せないが、いただいた種菌を絶やさぬよう、憑かれ

たように、牛乳をヨーグルトに変え続けていた。頻繁に一リットルの牛乳パックを買っていた気がする。とはいへ、ヨーグルトになれば消費できるのか、と問われれば、そうでもないな、と思う。実際、最終的には消費しきれず、だめにしてしまつて、冷蔵庫から消えていったのだろうか。

ナッツの蜂蜜漬けがなくなる前に、市販の「カスピ海ヨーグルト」に入れて食べてみよう。ヨーグルト・スパイラルは、今の私には荷が勝ちすぎるから、食べ切りで。



(イラスト あきの素生)

いつも、何度でも



ドラメリア (座敷わらし)

読書記録をつけている。仕事柄本を薦める機会が多いのだが、読み終えた本は端からぼろぼろと脳みそからこぼれ落ちて、もはや先週何を讀んだかすら忘却の彼方。もともと自信のない記憶力は年を重ねるとともにすり減ってゆく一方なので、外部的な記憶装置に頼ることにした。

ツールは、讀んだ本や持っている本を登録してネット上で管理できる、いわゆるウェブ本棚サービスを使用している。トピックを立てて情報交換したりユーザー同士で交流するようなコミュニティ機能は使っておらず、本にただただ讀んだ本を記録していくだけが、備忘録としてはじゅうぶんだ。これで「最近なんか面白かった本ないですか？」という頻出質問にも耐えられるし、ものぐさマンガ読みあるあるの痛恨のダブリ買ひも回避できる。完璧だ。と思ったのだが。

先週末、なんとなくジャケ借りした本を数冊持ち帰っ

た。どれも面白く読み終えたが、どうれ記録を残そうかと登録しはじめて驚いた。すべて数年前に読み終えた本だったのだ。軽くショックだった。読み始めてみて「ああ、これは讀んだことがあったな」とやめることはよくあるが、本当になにひとつ覚えていなかったのだから。「題材は面白いがキャラクターが少し弱い」と抱いた感想とまったく同じことを書いてさえた。

何だか悲しかったので、こう自分に言い聞かせる。逆に考えるんだ。いつも、何度でも、初めてののように楽しめる。それもまたよし、と。



・編集後記：

エアリズムのマスクが気になりますが、ユニクロはわたしの鳥取地図には存在しない地域。使われた方、感想を教えてください。なお、ウェブ本棚は本名でもこの名前でもありません。探さないでね。

ドラメリア (編集長)

読書のトレール (踏み分け道) に思いをはせます。トレースは追跡。ひとに教えてもらった一冊から果てなく物語の連鎖へと踏み分けるトレース。そんな読書の日々です。

奈良敏行 (発行人)